

## Titel

### 被ばくし続けるフクシマと世界の原発労働被ばく

#### 写真ジャーナリスト・樋口健二氏のインタビュー

- 樋口さんを写真家として突き動かしてきたものは何ですか？

樋口：私は信州（長野県）の農村で生まれ育った農民です。冬は5か月間、東京へ出稼ぎをし、18時間労働を強いられました。1950年代はまだ日本も戦後の貧しさの中にあり、農業への希望を失い、東京へ出ました。経済成長は1960年を皮切りにスタートしますが、その前年に製鉄所の工員としてクレーンの運転士になりました。私の宿泊先のおじいさんがひどい喘息に悩まされていた。聞くと工場がドンドン出来て、空気がひどくなったという。そんな時、友人が、世界的な戦争報道で著名なロバート・キャパの写真展を観るよう勧めたのです。写真に当時興味はなかったが、戦争の実態を目の当たりにして震え、感動を受けました。カメラで多くの人々に深い感動を与える素晴らしい仕事だと気付き、報道写真の道へ進んだのです。そのとき、私の体験した農民・労働者をテーマに決めたのです。写真学校を卒業後、石油化学コンビナートに苦しめられた「四日市公害」を追求したことが、「原発」に直結しました。

- 樋口さんが70年代に原発の労働者というテーマに出会い、それをずっと追いつけることとなった、その決定的なきっかけは何ですか？

樋口：我が国初の原発被曝裁判が大阪の岩佐嘉寿幸さん（故人）によって控訴されたのが1974年4月15日です。当時、日本は、テレビ、新聞、雑誌など、すべてのメディアが原発の平和利用をうたっておりました。日本の代表的新聞である朝日記者（女性、東大、哲学科卒）が提訴後の4月18日に「謎だらけの皮フ炎」「放射能説に悉く（ことごとく）異論」という記事を掲載したのです。原告にも代理人の弁護士にも取材せず、政府側を取材したおそまつ記事に接したことが私を奮い立たせたのです。私は真実を追求することが報道写真家の本道であったから。彼との出会いが被曝労働者を追求するきっかけとなったのです。

- 樋口さんはスリーマイル島（1979年）やチェルノブイリ（1986年）の事故が起こるよりずっと前から原子力エネルギーというテーマを批判的に問題にしていらっしゃいました。日本でもフクシマのような最悪事故が起きるということを想像してみたことがあったでしょうか？また、フクシマ事故のことが分かった時、最初に何を思ったか教えてください。

樋口：日本の原発1号炉がスタートしたのは、1966年7月25日です。東海原発1号炉です。それから2011年3月11日までの日本列島の各地に54基の原発が建ち並びました。面積からしたら、おそらく世界一かもしれません。私の視点は、原発下請け労働者の放射被曝ですが、これが原発の本質をとらえておりました。弱者を犠牲にする原発はいつか必ず大事故を引き起こすと確信しておりました。福島原発の大惨事は必然的であり、日本の経済成長と直結しておりましたので、それみたことかと思ったものです。

- 日本では、原子力産業（電力会社を含む）、政治、マスコミ、学者から成る緻密で多大な権力を持つネットワークの原子力ロビーのことを「原子力村」と呼んでいて、それで批判する人間が口が利けないような仕組みになっています。樋口さんは、日本のエネルギー政策が民主的に、将来を担うだけの開かれたものになるためには、まず何が変わらなければいけないとお考えですか？

樋口：政界、財界、官僚、学者（御用学者）、メディア、司法の原発六族が固く手を結んで巨大な利権組織を結託している限り、原発から手を引くまい。でも、東電福島第一原発の大惨事後、日本の原発は全部停止した。そのとき、水力、脱炭素火力、自然エネルギー（太陽光など）で十分電力はまかなえた。私は、メディアが広告料におどらされず、真剣に目覚め、脱原発のリーダーシップを取らない限り、民主的エネルギー政策は構築不可能と考える。国民の80%近くが脱原発の意識を持っているから希望もある。

- 日本の原発労働者と彼らが強いられているそのひどい労働条件のことを樋口さんは何十年もの間テーマとして追いつけてきました。その間で、何か変わってきたことがありますか？それともフクシマ後も変わらないで同じでしょうか？

樋口：2011年3月11日までは私の訴え続けた下請け労働者の放射線被曝問題はほんの一部の人たちだけが関心を抱いていたに過ぎませんでした。ところが、あの東電福島第一原発大惨事によって、被曝労働者の問題に火が付いたのです。40数年近く、一般国民は平和利用という言葉に洗脳されていましたが、やっとメディアが気づいたのです。有難いことに「ワシントンポスト」はじめギリシャの雑誌「イプシオン」が13ページ特集を組んでくれました。日本の大手新聞（読売は原発推進）、共同通信、雑誌、写真誌、女性週刊誌、テレビ3社が2011年～2015年までに86社、私を取材してくれました。また2年間で7冊の私の写真集、ルポタージュ本が出版されるという、思いもよらないことが起きました。福島原発については新聞、テレビなどが継続的に追求するようになりました。少しずつですが、脱原発へと変化しているように感じます。

- フクシマ後、日本人の間の意識、または日本の市民運動の中で何が変わったと思いますか？また、ポジティブな発展はありますか？

樋口：私個人が見れば、フクシマ後、大きな変化をとげました。私の講演がすでに196回を数えます。考えられない思いです。市民運動も明確な形で変化していると思っています。特に福島の人たちによる国と東電を訴えた裁判も60に及び1万2000人が参加しています。関心の高い人たちが裁判支援にまわっていることが大きな社会変革だと思います。相手が国と大企業だけに持続力を要します。

この書面インタビューは在ベルリンの日本人からなる反原発団体 [Sayonara Nukes Berlin](#) が行いました。

#### Biografie Kenji Higuchi:

樋口健二

1937年長野県出身。報道写真家。

高度経済成長期に伴う日本中の公害、炭鉱、原発とその放射能による犠牲者・被ばく労働者をメインテーマに取材を続けてきた。常に弱者、被抑圧者、被差別者の側に立った視線で、国家権力やその他の権力が隠し、過小評価または否定しては、歴史で闇に葬られがちな真実を暴いてきた。世界初の写真報道家として、原子炉内部で働く労働者を撮影した。2001年核廃絶NGO「ワールド・ウラニウム・ヒアリング」の「核のない未来賞」を日本人として初受賞。「闇に消される原発被曝者」、「これが原発だ - カメラがとらえた被曝者」など、著書多数。